

# 池澤夏樹 『南の島のテイオ』論

—隠されたポスト・コロニアル言説—

中野裕子

一

『南の島のテイオ』は、ミクロネシアの南の島で、父のホテルを手伝う十二歳の少年の眼を通して、そこから繰り広げられる様々な人との出会いやドラマをつづった児童文学作品である。十編の連作短篇から成るこの作品は、ミクロネシアの旅行でこの土地に魅せられた池澤が一九八三年に第一作目の「空の絵」(注1)（のち、「空いっばいの大きな絵」に改題）を発表してから、同じ主人公の連作を児童文学雑誌「飛ぶ教室」に発表した計十本に、モデルとなった少年が書いた体を取った「あとがき、あるいはテイオの挨拶」を加筆して、単行本『南の島のテイオ』（楡出版、一九九二年）として刊行された。

ところで池澤夏樹は、ミクロネシアの島々を舞台にして三つの小説を書いている。(注2)

『夏の朝の成層圏』（一九八四年）、『南の島のテイオ』（一九九二年）、『マシアス・ギリの失脚』（一九九三年）の三作品だが、

そのうち、『夏の朝の成層圏』、『マシアス・ギリの失脚』の二作品は、ミクロネシアの群島、海域に架空の無人島もしくは小国を作つて舞台とし、『南の島のティオ』は池澤が最も多く足を運んだとされるポナペ島が舞台となっている。

もちろんこれらの三作品は、異なる時期にそれぞれの意図をもつて出来上がった作品である。たとえば『夏の朝の成層圏』は二十代の頃の自分が、日本との折り合いの悪さから「出口」<sup>(注3)</sup>を求めてこの作品を書いたとされている。また、『南の島のティオ』は、日本が失くしてしまった「無垢のままの子供たちの暮らし」<sup>(注4)</sup>がポナペ島にはあり、それを

書くということは自分にとつて、理想の「楽園幻想の投射」<sup>(注5)</sup>であると振り返る。その後書かれた長編小説『マシアス・ギリの失脚』になると、児童向けの『南の島のティオ』では書ききれなかった、政治的な視点を含めながら、対日本における反近代的な、ポスト・コロニアル的視点を前面に押し出した小説となつていくことが分かるだろう。だが忘れてならないのは、この三作品に共通し、しかし異なる表象で示された池澤の問題意識が、ミクロネシアという「楽園幻想に仮託された異郷」<sup>(注6)</sup>という文脈にあるということである。

それは言い換えれば、(異郷)に投射された日本人としての自分とは何か、という問いが池澤の関心事であつたということである。『南の島のティオ』を読み解く場合、主人公ティオの理想化された視点から生み出される楽園幻想のメカニズムを解くためには、その後に書かれた『マシアス・ギリの失脚』における批判的言説を同時に視野に入れることで、相対化される言説があるはずである。本稿では、ミクロネシアを舞台としたこれらの作品を視野に入れつつ、『南の島のティオ』においては児童文学ゆえに隠されたもう一つの物語、あるいは児童文学ゆえに異なる表象を取つたもう一つのポスト・コロニアル言説に目を向けていきたい。またそのことは二〇一〇年に出版された文春文庫に所収された

作品「海の向こうに帰った兵士たち」という一編を、あえて池澤が『南の島のテイオ』に加えて増補版とした意図とも通じてくるだろう。

二一

池澤文学の中でミクロナシアという〈場所〉を考えると、まず彼の基本的な創作姿勢からみる〈場所〉へのこだわりを確認しておきたい。

またよく個人のライティング・スタイルでいうと、まず最初に場所がある。ロケーションというものを設定した上でないと、物語が始まらない。・・中略・・ぼくの場合そういう地理的な背景をきっちりつくってからでないと、物語がスタートしない。  
(『沖に向かって泳ぐ』)

『夏の朝の成層圏』では架空の島の地図、地形を考え、主人公がその島に辿り着いた経路を考えたといい。(『沖に向かって泳ぐ』)小説を書く上で、池澤は「場所」という「地理的な背景」を織り込んだ手順を重要視している。それが単なる地理でないことは、池澤がロレンス・ダレルの言葉で「人間の性格とは風土の反映である」と説明していることでもわかるだろう。「土地」ごとに違う精神のありよう<sup>(注)</sup>を探るためのフィールドワークが池澤にとって「旅」という体験なのであって、その体験に基づいた地理が、物語における歴史、ひいては人物造型をかたどっていく。このことはおそらく池澤が多大な影響を受けたガルシア・マルケスの『百年の孤独』についての言及からも明らかである。池澤は、

マルケスが「マコンド」と名付けた、この物語だけの〈場所〉に「ブエンディア家」一族の六代にわたる百年の盛衰物語を立ち上らせた手法を「土地の力の再発見の物語」<sup>(注8)</sup>と称し、従来の近代小説の方法論に余地を提出した作品として評価している。

マルケスに見る「人の想像力を増殖する場の力」<sup>(注9)</sup>を、ミクロネシアのそれに池澤が置き換えれば、ポナペ島に敗戦まで続いた日本の植民地支配の帝国主義的歴史の「大きな物語」と、南の島に残る「反日本としての島社会」(『池澤夏樹の旅地図』)の伝統的物語の「小さな物語」といえるだろう。周知の通り、第一次世界大戦後、戦勝国として国際連盟の常任理事国となった日本は、旧ドイツ領のマーシャル、リアアナ、カロリンの三諸島、いわゆる南洋群島を委任統治領として第二次大戦の終戦まで治めた。ポナペ島もその日本の委任統治領の一つであった。明治・大正期の日本における南進論は、第一次世界大戦後の南洋群島の委任統治権獲得として進められ、さらに昭和十年代には、南洋群島を「海の生命線」と呼んで南進論は国策化し、島での、日本人の移民政策、日本への同化政策(日本語教育、皇民教育)を推し進めていく。<sup>(注10)</sup>

一つの例として、かつてのドイツ領だった時代のポナペ島で起こった島民のクーデター、ジョカージの反乱がその事実そのままに『マシアス・ギリの失脚』に入れこまれていること自体が池澤の批判的言説である。つまりドイツのみならず、日本も含めた、「委任統治」という名の相手国へのポスト・コロニアル化の危険を池澤はこの箇所ですべて示している。<sup>(注11)</sup>

さらに池澤がその巻末で参考文献として挙げた矢内原忠雄の『南洋群島の研究』(岩波書店、一九三五年九月)をみると、ドイツの委任統治が「文明の神聖なる使命」の遂行を謳いながらも、実は南洋群島を「投資植民地」として見て

いるにすぎなかった、と矢内原が言及していたことがわかる。矢内原のドイツ批判に、池澤もおそらくは同調的だったとみるべきだろう。なぜなら、(異郷)に踏み入ることが「先の土地の民にとっては侵入者による搾取」(『池澤夏樹の旅地図』)であると、池澤ははっきりと言及しているからだ。これは資本主義国の日本人として生まれ育った池澤の、(異郷)への基本的姿勢にもつながってくる。

さて、先を急ぎ過ぎたが、『マシアス・ギリの失脚』について述べておきたい。

『マシアス・ギリの失脚』では、人口七万という南洋群島の小国・ナビダード民主共和国の大統領になったマシアス・ギリの一代記を交えながら、勝手な植民地化を繰り返す日本・アメリカに翻弄される島の運命を、ギリの視点で描く。揺れ動く島の文明化と伝統の間の葛藤は、そのまま小国の揺らぎ、ギリの心の揺らぎとなって物語を牽引していく。

日本通で日本の教育を受け、積極的に文明を受け入れ、商人から大統領にのし上がった、マシアス・ギリは文明化を推進し、その言説も(近代的言説)と言える。一方、対照的に描かれるのは南洋諸国の社会システムの中で育まれてきた(伝統的言説)で、両者はお互いを投射する形でポスト・コロニアル的視点が表象される。

例えばこの島にもたらされる最も分かりやすい文明化の表象は、(空港)、(貨幣経済)、(基地)で、マシアス・ギリの心境と共に描かれる。

日本とアメリカの全面的援助で作ったナビダード共和国の(空港)を「この島国の今世紀における生き方の象徴」とギリは考え、この小国の大統領たる自分の務めは「実質的な独立を願う島のイデオロギーと外からの経済的・政治的な圧力の均衡を保つこと」だと小国の運命を心得ている。そして小説中の「日本」は、この小国のブルン環礁に石油備

蓄基地を作り、その海面使用料を半永久的に支払うことと引き換えに、マシアス・ギリを、揺さぶってくる抜け目のない国として描き出されている。当然、石油基地は国際関係の悪化いかんでは武力の拠点と変わる。狡猾な日本のやり方を鏡に映すことは、小国に課せられた安全保障という名の再植民地化を暗示しているのだろう。物語から一步外に出れば、それは、現在進行中の、アメリカとの安全保障と沖縄の基地問題を抱えた日本の姿と合わせ鏡であるのだが。

(注12)

しかし日本の出方を最大限に利用しながら、経済発展を得ていこうとする貪欲なマシアス・ギリの生き方は近代化の象徴である。一方で、〈貨幣〉でしか買えない米の味を教えたことが日本人の「最大の害悪」という島民の言説は、近代化の弊害としてのゴシップとなつて用意され、ギリの政治的姿勢の疑義をも暗示する。このゴシップ効果は、日本もたらした〈貨幣経済〉が、自給自足の島民には根付かないこと、もしかするとこの国の伝統的社会的秩序を根本から破壊しかねない資本主義の弊害をも運んできたという池澤の文明批判なのである。

ところでマシアス・ギリの言説の効果的な相対化として、ガルシア・マルケスのいう「マジック・リアリズム(魔術的リアリズム)」<sup>(注13)</sup> というべき、非日常的な二つの言説を池澤は用意している。一つはマシアス・ギリを失脚に導く神秘的な存在・エメリアナが舞う「ユーカ・ユーマイの祭り」の伝説的言説であり、いま一つは史実にもあるリー・ブー伝説を材料にした亡霊リー・ポーとマシアス・ギリとの対話である。いずれもギリと対峙させることでその意味は批判的な言説へと意味を変える。

まず、「ユーカ・ユーマイの祭り」についてだが、この祭りが行われる、マシアス・ギリの故郷・メルチョールとい

う土地は、物語の中での正にマジックランドとして設定されている。そこは巫女のいる神事を残した伝説の土地であり、「ユーカ・ユーマイの祭り」は八人の巫女がそれぞれの場所をめぐって神のもたらす豊穰を手招きする神事であると設定されている。これは池澤がこの時期好んで居住した沖縄の久高島のイザイホーの祭りを想起させるだろう。(注14)池澤は、この神事に、近代的解釈を加えず、その土地の歴史が育んだ伝統的な、純粹な聖性を、「二人のメルチョール人」としてギリに感じさせ、その祭りに「共同体の束ねられた意思」を確認させている。

だが結果的にマシアス・ギリは、選挙での不正、ライバルの暗殺企図が発覚し、メルチョールでの長老会議(注15)において、職を解かれる審判を受けることとなる。ギリは近代的な司法によって裁かれるのではなく、司法同様の重みをもつ故郷・メルチョールの長老会議で裁かれる、いわば共同体の意思から拒絶され、排除される構図となっている。

〈共同体の意思〉からはみ出ることはメルチョールの〈伝統的言説〉において、死を意味する。ギリが「ユーカ・ユーマイの祭り」の日に、その巫女の一人であるエメリアナを犯し、妊娠させる件でも象徴的である。「聖なるエメリアナが眠る不可侵の場所」に押し入って彼女を犯すことは〈聖性の侵犯〉であり、彼女たち巫女の持つ〈共同体の意思〉に、新たな〈自分個人の意思〉の符号を植え付ける意味にもなるだろう。それは出自がはっきりしないコンプレックスを持つギリが求めてやまない、近代化の記号を付した〈共同体の意思〉の進化形なのであった。だが、エメリアナによって失脚の事実を暴かれ自殺に追い込まれるギリは、拒まれた。メルチョールという土地からの二重の拒絶は、裏返せばギリの個人的な、あるいは近代的な大統領としての言説を両方、否定するものとして機能している。

今一つ、亡霊リー・ポーとギリとの対話も裏返された文明への批判的言説である。

池澤の書いた亡霊「リー・ポー」とは、パラオ人で大酋長の息子リー・ブー(SeeBoo)であり、一七八三年、東インド会社の船「アンテロープ号」がコロール付近で座礁した際、パラオで数か月滞在の面倒を見た交流をきっかけに、国交の懸け橋となるべくリー・ブーはイギリスへ留学したが、二十一歳で天然痘のため病死した、実在の王子である。<sup>(注)</sup>

<sup>16</sup> 例えば、須藤直人によれば、<sup>(注17)</sup> リー・ブーの物語は、南洋を扱ったジョージ・キートンの『パラオ記』以来、「高貴な未開人」として小説、演劇その他多数の作品で語り継がれ、一九九四年のパラオ独立の時期に、南太平洋のポスト・コロニアル的表象として、池澤の『マシアス・ギリの失脚』およびパラオ作家・シータ・モレイの英語詩にも表されたという。池澤の書いた『マシアス・ギリの失脚』(一九九三年)の中の「リー・ブーの物語」は、須藤氏の指摘のように「個になりきる以前の、共同体の構成要素」(須藤氏、前掲論文)を担って「やがて世界を支配することになる北の偉大で強欲な国」<sup>(注18)</sup>と、「搾取される南の小さな島」<sup>(注19)</sup>の二つの文化で揺れ動く小国の在り方を現出させている。リー・ブーは不慮の死を遂げた幽霊の王子という立場から、ギリは大国の委任統治にある小国の大統領という立場から、二人はポスト・コロニアル的視点を共有意識として対話をしている。「遠い強大な国の文化を自分たちの文化に注入し、外からの力に備え、ある意味では自分たちの文化の近代化を図る」ことの困難、すなわち「二つの文化システムを一身に備えるのは不可能に近い」ことを悟ったリー・ブーは、やがて過ちを犯してしまったギリと最後の対話を試みる。

「二つの意思。どうか。この世界では、個人はきみが思っているほど個人ではないよ。ここは日本ではないから。生きた者、死んだ者、たくさんの人間の考えや欲望や思いが重なり合って、時には一つの意思のようにふるまうこともある」

(『マシアス・ギリの失脚』)



〈個人的な意思〉によって資本主義と立ち向かう不正な資金繰り、邪魔者の排除を行ったギリの過ちを指摘するリー・ボアの言葉は、ナビタードの小国に今なお息づく伝統的な〈共同体の意思〉を明確に示している。それは「一つの意思」といえる〈個人的な意思〉に傾き、〈共同体の意思〉をすでに捨ててしまったかに池澤には見える資本主義国・日本の危うさであり、小森陽一の言葉を借りれば、植民地の「自己植民地化」<sup>(注20)</sup>とでもいいうべき様相を呈した戦後日本への批判的言説といえるだろう。

以上のように、『マシアス・ギリの失脚』はミクロネシアという小国におけるポスト・コロニアルの問題の多義的可能性を書いている。大国に身を委ね、依存していくことで国の安全を取らざるを得ないナビタード国の「自己植民地化」の危うい局面は、そのまま戦後日本の位相とも読めるだろう。それは『南の島のティオ』の描く楽園幻想と一枚岩なのである。

## 二

具体的に『南の島のティオ』を見ていきたい。十編の短編はいたるところで、対比される島の〈文明化〉と〈伝統〉が、理想的なバランスを保ちながら、時に先述したマジック・リアリズムの手法を用いて作品の世界観を形作っているのだが、例えば「絵はがき屋さん」には、この『南の島のティオ』を児童文学作品とするための作者のスタンスが覗える。

島に持ち込まれた〈文明化〉の足跡として、例えば空港の描写は次のようなものである。

飛行機は週に三度、月曜と水曜と日曜に島にやってくる。

父とぼくがいつもより遅く空港に着いて、車を置き、パンダナスの葉で屋根を葺いたターミナルに入ると、もうかすかな爆音がオレンジ色に染まった西の空から響いてきた。

(『南の島のテイオ』、傍線引用者)

一方、『マシアス・ギリの失脚』の空港の描写を比べてみたい。

空港のターミナルについて言えば、これは八年前に日本とアメリカ合衆国の援助で造られ・中略・・いったいこの国としては彼ら食欲な二つの大勢力に対して、ジャングルを削って走り回る三菱キャタピラー社の巨大なブルが造った滑走路・誘導路と、周囲の椰子の林を圧倒して聳える醜怪な似非現地様式のターミナルに対して、何をもって支払いをすればいいのか、それはいつになっても不分明だった。本来ならばこの島に育った木々の幹で作られるはずの合掌造りの屋根の形を鉄筋コンクリートが不器用に模している。破風のモルタル面には、これも本来ならば泥絵具で描かれるべき動物や精霊や木々や天象地象の絵がアクリル・ペイントを用いて妙に器用なタッチで描かれている。

(『マシアス・ギリの失脚』、傍線引用者)

空港のターミナルの外見は、『マシアス・ギリの失脚』では、他国によって無残に自然を壊された鉄筋コンクリートの屋根であるのに対して、『南の島のテイオ』は地元の植物を使った自然味あふれるそれで、そのあと空港に降り立った観光客が、夕日に染まった克蘭ボクの山をみて感激する場面に移る。『南の島のテイオ』の空港は、地元の風景になじんだ理想化された場所として描かれるのである。マシアス・ギリが空港の裏に見抜く、自国の自然破壊と引き換えの文明化、「アメリカと日本の両国の飛び地のような」(『マシアス・ギリの失脚』)といった批判的な言説を、語り手であるテイオ

は持ち合わせていないのである。

そのことは『マシアス・ギリの失脚』の中で語られる空港、軍事基地の話を始めとした様々な批判的言説のエピソードの一つ一つが、『南の島のティオ』の「絵はがき屋さん」の章では、ユーモアをもって「楽しそうに」絵はがきさんが語った「さまざまな土地のこと」の一部として、子どものティオの興味をそそるエピソードにすぎない書き方になっていることでも明らかである。例えば〈空港〉は、『マシアス・ギリの失脚』のナビダード民主共和国が日本の石油備蓄基地にされて利用されていく苦々しい件に対し、「海辺の空港に降りる飛行機はその人たちが庭先に飾った植木鉢を蹴倒すように着陸し」（「絵はがき屋さん」）「また別のある島には飛行場と大きな燃料のタンクがあるだけで人はだれも住んでいない。」（「絵はがき屋さん」）というエピソードの範疇にとどまっている。逆にその島を支配するような「大きな都会」のエゴは「あんまり人がたくさんいるので土地が足りなくなり、人は高いビルの屋上にまで住んでいる」（「絵はがき屋さん」という形である。どれもある種の現実世界の風刺を含んではいるものの、ユーモアたつぷりの笑い、コメディとして片づけられている。今一つ例を出せば、「ガンカンドリの仔」が「飼い主が手にぶらさげた魚をさつとくわえてまた舞い上がるという芸当」（「絵はがき屋さん」）を身に付けたという件にそっくりなエピソードが、『マシアス・ギリの失脚』では、強欲なにわとり婆さんの話に変容する。偶然、観光客に引き殺されたにわとりでお金をもらった婆さんが、味をしめてわざと車めがけてにわとりをぶつけ、ひと儲けする話、そしてにわとりも学習して殺されなくなるという、狡猾な人間と動物の話へと改作されたエピソードとなる。リー・ポーにそれを語らせることでギリの抜け目ない政治的姿勢を暗示するための効果的装置になっているのだ。いずれも「絵はがき屋さん」（『南の島のティオ』）のエピソードは、

同じエピソードを『マシアス・ギリの失脚』が示した人間の計算高さ、近代化への批判的言説ではなく、異郷の興味深いユニークなエピソードにとどまる。それはこの挿話を語る「絵はがき屋さん」の語り手・ピップさんが、不思議を引き起こす〈伝統的言説〉の住人であって、〈近代的言説〉の住人ではないということの証拠であろう。

池澤はむしろ『南の島のティオ』で、伝統的な時間に包摂された文明社会、という理想的な楽園幻想を描こうとしている。絵はがきを受け取った人が必ずその地を訪れるという、絵はがきの「魔法」の力は、文明化された人を再びこの土地に呼び寄せる。この島の山奥に咲く「白いランの花」を見た人に「生まれる以前の」記憶、つまり〈共同体の記憶〉を想起させて観光客を呼び寄せる力は、この土地の持つ、〈円環する共同体の力〉の作用といえよう。そしてこの絵はがきの「魔法」が与える「満ち足りた旅をさせる力」といった〈円環する共同体の力〉こそが、『南の島のティオ』に通底する幸福感、楽園幻想であり、『マシアス・ギリの失脚』の批判的言説にはない児童文学の表現方法といえるだろう。

#### 四

『南の島のティオ』には、日常世界の中で不思議な出来事が絶えず起こる仕掛けになっているのだが、『マシアス・ギリの失脚』の「メルチョール」<sup>(注21)</sup>に当たる、共同体の原理をもつ〈マジックランド〉は、『南の島のティオ』においては「トールラス環礁」である。『南の島のティオ』という作品がオムニバス形式で各編が完結しているので、『マシアス・ギリの失脚』ほどストーリー全体の一貫性をもったテーマとして立ち現れないまでも、注意深く読むとその設

定はマジック・リアリズムを作るためのマジックランドの役割を担っている。

例えば「十字路に埋めた宝物」では、観光客のため作った「舗装道路」という〈文明化〉の代物に対し、その舗装したての十字路の真ん中に穴をあけて宝物を埋めたバムという男性は、トーラスの出身だった。幸福を人に分けるために「いい物を十字路に埋めておくと、そこを歩くみんなにいいことがある」というトーラスの土地に伝わる神話・伝説を、今も生活に息づかせながら彼は生きていく。ほかの島民が彼の行為にどのような反応を示すのかは、それぞれが自分たちの生活の中に入り込んでくる〈文明化〉と島に元来ある〈伝統〉の間でどのように折り合いをつけていくかという問題であることは、拙著でも触れたが、<sup>(注22)</sup>バムを咎める島民は誰もいない。「なにも、工事が終わってすぐに壊さなくてもいいのに」と非難する建設局の「サブローさん」<sup>(注23)</sup>さえも、全否定はしない。むしろ美しい貝殻が入っていたその宝物の伝統的価値は島民の共有意識となつて認められ、日本の技術でもたらされた文明化の象徴である舗装道路に穴をあけたバムの罪よりも尊重すべきことなのである。その「生きた化石」<sup>(注24)</sup>ともいわれる南洋の巻貝・「リュウグウオキナエビス」は、その昔、希少で数百万の値がついたという高価なもので、「トーラス」という土地の伝統的空氣を立ち上らせるという意味に合った宝物であろう。

だが「宝物」という〈伝統的表象〉と対比する〈文化的表象〉、「舗装道路」はそもそも島民にとって必要なのか、という問いが素朴な島民の無意識下に、巧妙に隠されていることに読者は気付くだろう。「もともと雨の多い島で」、すぐに「沼のようなぬかるみ」で車が立ち往生する場所で、でこぼこ道が多く、セカンドギアしか入らないという地理的説明に加え、そこをわざわざ走るのは「政府などの車」か、「お客の送迎用の車」であつて島民でないことを語り手・テイ

オに巧妙に語らせている。だがテイオは「道路工事を専門にやる日本の会社の人」の工事の様子を好奇心旺盛な子供らしく「毎日夢中になって」眺めるものの、批判的言説は持たない。あくまでもテイオは島に起こっている事実の目撃者として〈文明化〉と〈伝統〉の共存する理想的な形を伝える語り手となっている。舗装道路という文明化は、テイオの語りを通じて事実のみを伝えることに終始して、むしろバムさんの「美しく、きらきらと輝いていた」宝物にまつわるトーラスの伝統的世界とその心を理解する島民の純朴さにすり替えられている。

「地球に引っぱられた男」という話では、「トーラス環礁の」、「一番大きな島でスーパーマーケットを経営している」男で、島に一台しかない飛行機を金に物言わせ貸切るような、傲慢な一面をもつヘルナンデスという男が登場する。「まるでこの諸島全体の大統領かなにかのようだった」というデフォルメは明らかに次作の『マシアス・ギリの失脚』のマシアス・ギリという人物像の着想になっていることは間違いないだろう。この男、島の巫女的存在である「カマイ婆」から、乗っている飛行機が落ちると予言され、予言は的中して「空港の沖の海の中にポチャンと落ちて」、船に乗り換えるがそれでも落ちる。「あの男は落ちる。あんまり悪いことをした。神々は怒っておられる」とカマイ婆は言うのだ。結局、船に乗り換えた男は、甲板でデッキの階段を踏み外して転落死するのだが、この島の精霊信仰の掟に裁かれた男であることを強調する書き方となっている。<sup>(注5)</sup> 男の死体はその後、冷蔵庫に入れられたまま、船上では宴会が行われるのだが、ユーモアたっぷりの描き方によつて島民の素朴な死生観を伝えるのが『南の島のテイオ』の特徴である。〈共同体の原理〉である精霊信仰・神の啓示に逆らえない死を体現するヘルナンデスは、マシアス・ギリが故郷・メルチョールで裁かれ、死をもつて〈共同体の回帰〉へと変容を遂げる〈近代化する島民〉の元型と見ることができよう。

「ホセさんの尋ね人」でもこのトールラス環礁は物語の重要な舞台になっている。

第二次世界大戦中に「トールラス環礁を基地としていた日本の艦隊」が居住する中、ホセさんは、日本兵に目をつけられ嫌がらせを受けているマリアを助けて恋仲になり、逃げてきたこの島に一時期二人で暮らすが、やがて終戦を迎えて、いったんフィリピンに帰る。それきり別れたマリアを探してホセさんは三十五年ぶりにこの島を訪れたという設定になっている。フィリピンに彼を探しに行き、後の余生をこの島で静かに暮らして死んでいったマリアはトールラスの女である。字の読めないマリアが、国に帰るホセに「紙に書いた言葉なんか知らない。それよりも早く連れに戻って」という件も、口承伝承の国としての「トールラス」の伝統的特色がよく計算されて設定されていたことを表している。<sup>(注26)</sup>それを体現するマリアはまさにその土地らしい女性として造形されている。そして黒ずくめの外見が「魔法使い」だと恐れられている神秘さ、マリアを知る女性から話を聞いている間、窓の外に「チョウが舞っていた」という小道具の効果も、『マシアス・ギリの失脚』を読んだ読者には納得できるはずである。『マシアス・ギリの失脚』ではメルチョール出身で不思議な霊力をもつエメリアナの聖性を示す小道具として、「藤色の蝶」を舞わせたように、文化的に別世界の表象として蝶は有効なのだろう。戦争で引き裂かれた彼をじっと待つマリアの悲劇は、蝶々夫人を想起させるポスト・コロニアル言説をも背負った物語として日本人の読者にも訴えかける。トールラスの女・マリアもまた、フィリピンでの、現実的生活を選んだホセさんとは別の世界の住人として描かれている。

また、マジック・リアリズムを形作るのに欠かせない、ミクロネシア特有の精霊信仰については『南の島のテイオ』の作品内で至る所に仕掛けられている。「地球に引っぱられた男」のカマイ婆の持つ霊力、「草色の空への水路」において、

モーターボートの水路を変更してしまうサラタイム力の神のいたずらも然り、「星が透けて見える大きな身体」でテイオが対決する「天の者」との交信、「エミリオの出発」において、遠方の未開の島から来た少年エミリオが守り続けようとするカヌーの伝統、儀式、そして世界万物の音を羊歯の葉に集める魔法もそれである。テイオよりさらに伝統的世界に生きるポリネシア系の島、ククイリックから来たエミリオの言葉を借りれば、それらの「魔法」を使って人間は「昔はいろいろなことができたんだよ。でも、外国から品物が入ってきて、そういうものを相手にしているうちに、みんな忘れてしまったのさ。」という。全ての万物に神が宿っているという精霊信仰とそこから生まれるタブーは、かつての彼らの生活の秩序を形作っていたのであり、その生活の危機管理として儀式が存在していたというものである。(注27) この伝統的コスモロジーと近代的コスモロジーとの葛藤を書くのではなく、文明によって消えつつある伝統的コスモロジーを心地よく伝えることこそ、池澤がこの児童文学の作品の中で伝えようとした、近代文明の読み替えではないか。

## 五

これまでの『南の島テイオ』の各編と比較して、文春文庫に増補された「海に向こうに帰った兵士たち」では、この地で戦死した日本兵の家族が慰霊に来る話を扱うことで、島に残る戦争の爪痕を、真正面から意識的に扱っている。初出は『TIO'S ISLAND』（小学館、二〇一〇年七月）という写真集で、二十年ぶりに訪れたミクロネシアで、改めてリアルに可視化できる島の戦後を、日本人として伝えようという意図があったことは推測できる。



日本兵の遺族とテイオの一行が、可視化できる戦争の爪痕の最たるものは、島のジャングルに今も眠る、手つかずの日本兵の遺骨だろう。テイオの母親が日本兵の遺骨に出会った様子を「ぼろぼろになった軍服に包まれて、脇には赤錆びの塊のようになった銃が転がっていて」と語る。その後、日本人の遺族の一行がジャングルの中を分け入り一体の遺骨に出会う場面にテイオも歴史の目撃者として立ち会うのである。

大木の根元のところ、半端に伸びた下草の黒っぽい布の塊のようなものがあって、其の脇に錆びた鉄の棒が転がっている。よく見ると朽ちた銃だった。

布の塊の中にわずかに白いものが見えた。骨だ。

（「海の方こうに帰った兵士たち」）

（語られる）話を聞くだけでは、夫の死を受け入れがたかった初音おばあさんは、（見る）ことで納得し、慰霊になるだろうとこの地を訪れている。お骨すら帰ってこなかった夫の死を、誰のものかわからない遺骨を持ち帰ることで、自身の慰めにもしようとしているのだ。戦争を考える上でそのことはテイオにも代えがたい経験になるはずである。

この島は第二次大戦が終わるまでは日本の領土だった。日本の兵士がたくさんいて、そこにアメリカ軍が攻めてきて、たくさん日本兵が死んだ。島の人も死んだ。その頃の話をも島の年寄り覚えていて、よく話してくれる。辛い時期だったとみんなが言う。

（「海の方こうに帰った兵士たち」）

思えば日本がこの島にもたらした文化の歪みは、冒頭の日本人遺族との日本食の場面から表れている。「マグロ漁の基地」は自国の経済開発に一役買っていた一方で、マグロの刺身を「醤油とライムとタバスコで」食べるといふ、日本文化の受容を余儀なくされている。

その島民たちが戦争に巻き込まれた「辛い時期」<sup>(注28)</sup>がどのように語り継がれているのかは、テイオの口から明かされない。それを年寄りたちの口から〈語られた〉言葉で示すよりも、自分の眼で白い骨を〈見る〉事の意味を、テイオにも、読者にも池澤は伝えたいのかもしれない。夫の遺骨が見つからず、「この島全体を征一郎さんのお墓だ」と思うしかない日本人も、終わらない戦後の犠牲者なら、引き取られない日本兵の遺骨を今だ自国の大地に抱く島民の戦後もまた、楽園幻想の裏側に隠された、終わらない戦後の現実である。

加えて、この章の後半に出てくる、日本軍の遺物のコレクターであるマクブライドさんはオーストラリア人という設定になっているのも池澤の意図的なものである。イギリスに長らく植民地支配されていたオーストラリア人がこの島の戦争の爪痕を目の当たりにして発する言葉が、ポスト・コロニアル言説を孕んでいることは容易に理解できるだろう。

マクブライドさんが修理する日本軍の戦車の話とともに、ジャングルに放置されたその描写は、この戦争の全てを如実に物語っている。

昔の日本軍はなぜだかこの島に分不相応の戦車部隊を配置したらしくて、タマンテグさんが調べたところでは軽戦車が九台も来ていたという。しかし、島の大半はジャングルだから走れる場所は少なかつた。アメリカ軍が迫った時、戦車の大半は山に逃げ込もうとしてジャングルの中で動きが取れなくなった。

（海の方こうに帰った兵士たち）

なにか「分不相応」なのか。島の土地勘のない日本兵にとって、そしてその戦車部隊がアメリカの軍事力と肩を並べて戦うにはあまりにも「分不相応」なのだ。小型の「軽戦車」というものが、もともとは植民地の警備用であり、戦力

として脆弱であることは明らかである。<sup>(注29)</sup> 島全体をこの浅はかな戦略で戦禍に巻き込んだ日本に対する池澤の冷やかな視線は「おもちゃみたい」な、「遊園地」みたいな戦車で「日本軍はこんなもので勇敢に戦って情けなく負けた」というマクブライドさんの諧謔的な言葉からもわかる。可視化された戦車にまつわる言説が、日本側、島民側の両者のポスト・コロナリアル言説として提示され、ここでもティオはこの会話の一部始終を聞く大切な目撃者、証人になっている。

修理した無人の戦車を海へ突き動かす不思議や、そのあとに旧日本軍の兵士が続く幻、そしてその中の征一郎さんらしき人が妻・初音おばあさんに手を振る件、持って帰ろうとした遺骨がなくなる件などは、『南の島のティオ』おなじみのこの島を彩るマジックのロマンであり、つじつまの合いすぎた出来過ぎた物語の終焉になっている。しかし、これも児童文学作品として用意された、一応の戦後の決着とみるべきであろう。

未来を作るティオたちが証人となって、海辺で見た日本兵の幻は、両国の歴史における絆と間隙が、植民地とした側と、された側との両者からの祈りと想像力によって埋められた瞬間であった。それはこれまで書かれた十編の「楽園幻想」の物語ではどうしても伝えることの出来なかつた戦争のメッセージであり、歴史の承認に違いない。

これまで『南の島のティオ』に池澤が巧妙にしかし意図的に隠したと思われる、日本との関係を含んだ小国のポスト・コロナリアル言説を見てきた。とはいえ、池澤が日本人の子供たちに託したメッセージは明確である。「今の日本にはない種類の価値あるものに出会える」<sup>(注30)</sup> という池澤のメッセージは、近代文明という歪みの中で窮屈に生きる日本の子どもたちへのメッセージである。全てを科学的根拠と理性によってしか計ることを許されない現代人の苦痛に対し、

テイオはいとも簡単に、シンプルに、文明と自然のどちらも否定することなく答えを導き伝えてくれる。その心地よい南国の風は、池澤夏樹が作り上げた楽園幻想でありながら、われわれ日本人が真似することのできない、あるいは忘れ去られてしまった〈共同体の意思〉の在処を示しているのである。

## 六

最後になったが、近年、池澤夏樹は自らの個人編集によって『世界文学全集』（河出書房新社、二〇〇七年十一月〜二〇一一年三月、全三十巻）を刊行した。また『日本文学全集』（河出書房新社、二〇一四年十一月〜、全三十巻）刊行も近日『源氏物語』をもって完結予定である。池澤独自の新しい視点によるアンソロジーというエッジの利いた全集は、実作と編集の両側面から彼の文学観が窺い知れる仕組みを作り出した。特に世界文学のセレクトにおいて彼が目指したポストコロニアリズムの視点、フェミニズムの視点、「移動の文学」<sup>〔註3〕</sup>という視点は、彼の文学観を三す。同時に、そのセレクト自体が池澤自身の作品との相関図を描き出しているといつてよいだろう。その道のりは世界文学を追求しているように見えて実は世界の中の日本文学について考える導線ともなっている。まさに池澤がアンソロジーとして並べた現代世界文学のサンプルは、彼が自らの作品ごとに閉じ込めた世界観を饒舌に語っている。

終戦の年に生まれた池澤夏樹が、一九四五年を起点として、そこから文学をどう読むのかは、国境を越えた文学を見るようでいて、実は〈日本人としての自分〉を問うことにもつながる作業であるのだろう。

- (1) 池澤夏樹「空の絵」(「青春と読書」、一九八三年一月号、のちに「空いっぱい大きな絵」)
- (2) 他にもミクロナシアを舞台にした詩集『塩の道』、短編集『マリコ／マリキータ』(一九九〇年)などがある。
- (3) 『池澤夏樹の旅地図』(世界文化社、二〇〇七年三月)
- (4) (3)に同じ。
- (5) (3)に同じ。
- (6) (3)に同じ。
- (7) 池澤夏樹ロング・インタビュー、新井敏記『沖に向かって泳ぐ』(一九九四年三月)
- (8) (7)に同じ。
- (9) (7)に同じ。
- (10) 日本の同化政策について、その内省もこめて池澤夏樹は『マシアス・ギリの失脚』で次のように言及している。「人が動けば文化も動く。このような方法で別の文化に組みこまれたことが、これらの島々にとって重大な意味を持ったことは言うまでもない。・中略・しかし、内南洋ではすべての人間が二級日本人であると規定され、日本語を教えられ、臣民として神社への参拝を義務づけられ、最後には兵士として遠い戦場へ赴くことを強制された。」
- (11) ジョカージの反乱については『マシアス・ギリの失脚』の中でも強国ドイツの植民地政策の一つの史実として記述がみられ、そのやり方を批判している。池澤の批判的言説はおそらく『マシアス・ギリの失脚』執筆に際し、

参考文献に挙げた矢内原忠雄『南洋群島の研究』（岩波書店、昭和十年九月）によるところが大きい。矢内原はジヨカージの反乱後にドイツが発行した地券は、「単に土地制度のみならず封建的社会組織の根本的破壊」であつたと指摘している。

(12) 前掲『池澤夏樹の旅地図』によると池澤は一九九四年から二〇〇四年まで沖縄で居住中、知念村にアメリカ軍の高官が講演に来ることに抗議文を書いている。これは単にそのことを許可した村長宛てにというよりは、国の巧妙な植民地政策に対してだという。このことはひいては異文化に対する姿勢にも関わることで、岡本太郎の沖縄との争いを例にとつて「文明の相互理解に名を借りた文明の侵略」になりかねないことへの注意を喚起している。

(13) 池澤夏樹『現代世界の十大小説』（NHK出版、二〇一四年十二月）で池澤が説明するように、『百年の孤独』をはじめとするラテン・アメリカ文学によく見られる手法で、「現実と幻想の共存」する小説を指す文学用語。

(14) (3)に同じ。

(15) 長老会議に当たるものとして、例えばパラオでは、一九八〇年に草案されたパラオ憲法の第八条第六項において、各州の全国首長協議会の権限を「伝統的な法、慣習、並びにそれらとこの憲法およびパラオの法律との関係に関して、大統領に助言する」（須藤建一監修『パラオ共和国―過去と現在そして21世紀へ―』、おりじん書房、二〇〇三年四月）と定義している。

(16) 『太平洋諸島百科事典』（原書房、一九八九年六月）他。

(17) 須藤直人『高貴な未開人』の比較文学―太平洋のポスト・コロニアル表象におけるパラオの王子リー・ブルー―

〔比較文学研究〕(99)、二〇一四年八月)

(18) 池澤夏樹『マシアス・ギリの失脚』の本文中の言葉。イギリスのことを指している。

(19) 出典、(18)に同じ。パラオのことを指している。

(20) 小森陽一『ポスト・コロニアル』(岩波書店、二〇〇一年四月)の中で小森は、文明開化期の日本を例にとつて「欧米列強という他者に半ば強制された論理によって自発性を装いながら植民地化する状況」を「自己植民地化」と呼ぶ。また第二次世界大戦後の日本においては、植民地支配の責任を曖昧にする「アメリカと日本の相互模倣的な『日米談合象徴天皇制民主主義』」が、新たに作られた「主体化」であると同時に「隷属化」である関係を生んだと指摘している。

(21) 先述の通り、メルチョールはギリの母の出身地であり、ユーカ・ユーマイの祭りの場所、そして長老会議のある共同体原理を残す土地という設定である。

(22) 中野裕子「十字路に埋めた宝物 解説」(北原泰邦・中野裕子『児童文学の愉しみ 20の物語 明治から平成へ』、翰林書房、二〇一四年八月)

(23) 現地人に見られる日本人的な名前の命名は、戦前の日本による同化政策と関係が深い。「昔、天を支えていた木」の「ヘーハチロさん」も同様の例である。

(24) 「日本大百科全書」(デジタル版)によると「オキナエビスガイ科の巻き貝」で「四国沖から台湾、さらにインドネシアにかけて、水深二〇〇メートル前後にすむ、殻高十七センチメートル、殻径十九メートルあるいはより大形」

の円錐形になる。また「世界大百科事典」(デジタル版)によると、一九六三年にはアメリカで一個二〇〇〇ドルの高値で取引されたこともあり、「その後台湾でとれたリュウグウオキナエビスガイを鳥羽水族館が一個一万ドルで購入し、現在これが貝の最高値となっている。」という。

- (25) ポナペ島の精霊信仰については、渡壁三男『ミクロネシア連邦主島 ポナペ島【続】言葉と伝承と民族性』(カンデラ書館、昭和五十八年九月)に詳しい。渡壁氏によれば、「精霊は妖精と靈魂に分けられ」、自然物や死者の魂に存在する。靈魂は部族の特有のトーテムで象徴されたり、守護靈として現れ、「ポナペでは、家長、氏族長、首長に払う尊敬と贈り物は、その偉大な守護靈への恐怖心からである」という。「現在でも、まじない、霊葉、呪文の中には精霊が生きており、その靈力によって人・家・収穫・漁業を守るのだし、危険や病気を避けてくれる」という。

- (26) 例えばミクロネシアの中で最も教育的関心の高いパラオを例にとっても、廣瀬淳一「ミクロネシア島嶼世界と教育制度・パラオの歴史(一八八五年・一九九四年)から考える内発的発展についての試論」(高知大学 学術研究報告)第六十三卷、平成二十六年)によると、「重要な伝統的知識ほど」「上流階層の間で口承伝承によって伝えられ、知識の文字化は否定的に受け止められて」いるという。

- (27) 精霊信仰に基づくこれらの儀式と、キリスト教の改宗をめぐる問題は紺屋あかり「パラオ社会とキリスト教」(境界研究)5号、二〇一五年)に詳しい。

- (28) 例えばポナペ島同様、日本の植民地ゆえに戦争に巻き込まれたパラオを例にとると、第二次世界大戦を体験した



パラオ女性は「日本軍が島にいたために、私たちと関係のない日本とアメリカが私たちの島のうえで戦争し、私たちの土地と命を奪った」と語る。(山本真鳥『新版 世界各国史27 オセアニア史』、山川出版社、二〇〇〇年八月、第七章「ミクロネシア史」、須藤健一)戦死者の数は「日本兵七万人、アメリカ兵六三〇〇人」の他「五〇〇〇人を越すミクロネシアの人も命を失った」(前掲書、第七章)とあり、パラオ女性のこの発言は、日本の植民地ゆえのパラオという小国の運命を言い当てた歴史認識といえる。

(29) 島田豊作ほか『戦車と戦車戦』(光人社、二〇一二年三月)によると、日本軍が南洋戦で使用した軽戦車は、「小型の九五式軽戦車」で、「対戦車用の重戦車、搜索用の軽戦車」という表現もあり、ポナペ島に残る九五式戦車の残骸も装甲が薄い(『パラオ共和国―過去と現在をそして21世紀へ―』、監修 須藤健一、おりじん書房、二〇〇三年四月の写真参照)ものであった。かたや、米国の「M3戦車は、(中略)装甲十数センチ、(中略)容易にこれを屈伏させることはむずかしい」とある。南方攻略のビルマ進攻や、ペリリュー島ではこれらの95式軽戦車は、アメリカのM3、M4中戦車の前に完成している。

(30) 池澤夏樹「青い鳥文庫の読者に向けてのあとがき」(講談社青い鳥文庫『南の島のティオ』、二〇一二年五月)

(31) 『池澤夏樹世界全集を編む』(河出書房新社、二〇一七年九月)